

2013.05.23

「慰安婦問題より大事なこと」

こんにちは、参議院議員の西田昌司です。本日は5月23日です。本日は日本維新の会共同代表・橋下市長のいわゆる従軍慰安婦問題についての発言が、非常に大きな外交問題・内政問題に発展しており、維新の会の支持率急落が大変な話題になっております。その一方で、保守的な考えをお持ちの方は橋下さんの言いたいことはわかり、日本のみが今まで従軍慰安婦問題で国際的に非難されているがそうではないだろうという意見については賛同できるということが言われています。しかし、私はこの問題の本質は違うなと思っています。橋下さんや保守系の方が慰安婦問題について主張することに反対するわけではありません。私はあえてこのような問題を政治の場で議論するならば、もっと本質的なこと、つまり大東亜戦争は何だったのかということを議論すべきです。そして、慰安婦問題というのは周辺の話であります。むしろ、我々が背負ってきているのは大東亜戦争は侵略戦争であり世界に迷惑をかけた。そして、特に日本はドイツ・イタリアといったファシズム国家対民主国家の戦争であり、日本国民も被害者であったのに、流れの中で、戦後の重荷を背負わされており、これは東京裁判史観であります。アメリカを始とした連合国側の行為を正当化するために、このような歴史観で日本を断罪しようというのです。そして、日本は東京裁判を受け入れたのだから仕方のないことだと考えられています。確

かに判決を受け入れ、戦犯として多くの方々の刑が執行されました。しかし、果たして、先程から私が主張している歴史観が後世につながる日本の将来があるのかを、日本人が再度歴史を見つめなおす必要があります。この、東京裁判史観を認めてしまうと、今憲法の問題もようやく議論できるようになりました。元々、今の憲法は占領期間中の日本の主権がない時に戦勝国のアメリカが勝手に作成した有り得ないものでありますし、全文を読んでもみますと、明らかにアメリカが日本を従属させる意図があり、この憲法はおかしいと私たちは主張しているのです。そして、このことを含めても現行憲法で良いのだ、つまり「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、自らの安全と生存を保持しようと決意した」ということを是としてしまうのです。つまり、事の問題はあの戦争はなんだったのかという本質の問題をしなければならないのです。しかし、そのことを行わずに侵略戦争であると言い切り、周辺の数々の悲劇の一部を取り上げ、「あーだ、こーだ」と言うのは官僚的であり、あまり議論しても意味がないと思います。議論したいという気持ちはわからなくはありませんが、本質からはズレていると思います。私はここで慰安婦の議論をするのであれば、もう一度、歴史観の議論をすべきだと思います。安倍総理も、総理という立場でありますから、歴史のことに関して私の立場からは申し上げることはないし、学者などがしっかりと研究すべきであるという、ワンクッションおいた感じであり、言明をしないという賢明な立場であります。私も国会議員ではあります

が、肩書きや地位があるわけではありませので、私の考え方や、歴史観を申し上げてきました。そして、このことを語るためには国民の前に歴史の事実を一つ一つ明らかにしていかなければなりません。なぜ、戦争が始まり、どのような経緯で戦争が終わり、占領されたのかを国民に広めていかなければなりません。今まで 60 数年このことをきっちりと話されてこなかったのです。だからこそ、総理が仰るように歴史家がきっちりと検証すべきなのです。そして、本日たまたま書庫の整理をしていたところ、例に 8 月 15 日は終戦ではありますが、その前日 8 月 14 日に終戦の詔勅が閣議で署名されましたがその資料がありました。その署名に陛下が開戦から終戦に至る経緯を書かれています。そこに御名御璽をかさね、その文章が 8 月 15 日に玉音放送として流れていたのです。それを読むと非常に断腸、沈痛の思いで、なぜ終戦をすることにしたのかの経緯や、開戦に関する経緯も「自分達の自衛の為、東亜の安定の為であり、他国を侵略したり、主権を奪うつもりは全くなかった。しかし、その中で戦ってきたが自分達には理が無い、理が無いどころか、原爆という大量虐殺兵器で、多くの無辜の民が殺され、日本のみならず、文明の破壊に繋がるとして、ここは耐え難きを耐え、忍び難きを忍んで、このポツダム宣言を受託し、待ち受ける更なる苦難に日本人の心を一つに、国の再興に取り組み、日本人が大切にしてきた道義を広めていこうではないかということなのです。ですから、このような一つ一つの歴史事実を国民に知らしめて、国民一人一人が当時の状況に思

いを馳せ、もし自分が当事者であったならばどのような行動をとったかということ
ことを当時の方々と同じように考えるべきであります。そしてこのようなこと
の積み重ねが歴史を学ぶということなのです。その中で慰安婦で苦労された
方々もいらっしゃいますし、戦地に赴き兵士で苦労されたかたもいらっしゃる
と思います。このように個々の具体的な事実もあったと思います。そして、そ
ういったもの含めて、我々が歴史全体をみて議論する自体が、私は有り得ない
と思います。ですから、我々日本人が自分達の歴史を見つめなおすというこ
とが大事なことはないかと思います。この問題を進めていきますと、人間本来
の醜さ、特に戦争の様な、生命・国家を背負った極限の状態の中のことを、個
別にあげつらって議論するのは意味があるかもしれませんが、私はそれ以前に
歴史の全体像をしっかりと掴んでおくこと、またそのことを慮って考えようとい
う姿勢が大事であると思います。

本日はあえて私の考えを述べさせて頂きました。

本日もご覧になって頂き、ありがとうございました。